
ゴースト・ストーリー

緑一色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴースト・ストーリー

【Nコード】

N4386T

【作者名】

緑一色

【あらすじ】

一人の不良がある日、幽霊と出会った。
幽霊の願いはただ一つ。

外の世界を見てみたい

不良の最も長い一日が始まる・・・。

都内のとある小学校にて。

1人のベテラン教師が熱心に教鞭を執っていた。

ベテランと言っても、彼はまだ35。

21からこの仕事を始めたのでまあ、それなりに慣れてきているためベテランと称した。

だが、相手はまだ小学生。

教師の話など真面目に聞く訳が無かった。

1人の活発な雰囲気を漂わせる少女がわざわざ起立して発言した。

「突然ですけど、先生が先生になろうと思った瞬間ってのはいつだったんですか？」

生徒達は一気にざわつき始めた。

「おいおい、森下。今は国語の授業だぞ」

「ですから、面白い話し方ってのを教えてほしいんです」

森下と呼ばれた女生徒は現在勉強している『走れメロス』をそっちのけで別のページに乗っている『語るとは何か』のページを開いて教師へと見せる。

教師は困惑したような表情をしばらく浮かべていたが、やがて観念

したかのように苦々しく笑った。

「分かった分かった。森下、お前には負けたよ」

その一言で生徒達は更に騒ぎ始めた。

教師は「静かにー」と一声叫び、生徒達を黙らせた。

「じゃあ、話す前に言っておくが実は先生は昔ヤンキーだったんだよ。・・・信じられないって顔してるな。

あれは、中3の夏に入る前だったかな・・・」

教師・・・むらた　ともき村田智樹は淡々と自らの体験談を語り始めた。

「・・・ふー」

智樹は廃病院の元はナース・ステーションだった場所に置いてある椅子に座り、一息ついていた。

行儀悪く両足をデスクの上に乗せており、口には煙草が。髪をツンツンに逆立て、実は胸ポケットにジャックナイフを忍ばせている。

典型的な不良のスタイルである。

もちろん、格好に負けない程の悪事を智樹は行っていた。

喧嘩に万引き、煙草、最近はシンナーにまで手を出している。

だが、彼にとつての悪事はいわば暇つぶしのような物であつて、本心からの行動ではない。

何となく面白そうだから。

そう思つて始めた煙草をきっかけに、調子に乗っていると不良の先輩方に目をつけられ、そのままズルズルと色々なものを引き連れ、こんな風になつてしまった。

両親も至つて普通の人格の持ち主であり、どこをどう間違えればこゝなつてしまうのか。

周囲の人々も常々不思議がつっていた。

そして、短い小休止は終わりを告げた。

智樹と似たような感じの雰囲気を漂わせる少年が3人、ナースステーションの扉を開けて中へと入ってきた。

「あつ、見つけたぞ四中の村田！」

智樹の姿を見つけると、3人は智樹を取り囲むように円を作った。

そして、その後の言葉を続けようとした時。

智樹の拳が不良の一人の腹に入った。

「えぐ・・・」

腹を押さえ、苦しんでいる不良の鼻っ面に今度は膝が飛んできた。

啞然としてそれを見ていた残りの二人の顔面にも一発ずつ拳が飛んだ。

3人の不良たちは悲鳴か泣き声がよく分からない声を上げながら、

その場を去って行った。

また静かになったところで智樹の頭に一つの考えが浮かんだ。

「そういえば、この中の探検という最も面白そうなことをするのを忘れていたな」

言うが早いか智樹は歩き出していた。

それから20分間、智樹は地下の遺体安置所をはじめ3階の各部屋まで見て回っていた。

だが、やはり智樹の喜ぶような物はまだ見つからない。

珍しかったので患者のカルテを12枚ほどポケットに詰め込んだくらいである。

この病院は地下1階から地上4階まであり、3階まで既に見終えた智樹は半ば諦めかけていた。

照明1つ点いていない暗い階段を上がり、1番に目に付いた部屋の扉を開ける。

部屋の番号は401。

だが、ここに来てようやく智樹の期待に副った展開となった。

室内にはベッドが4つ置いてあるのだが、一番左端のベッドにかかっているカーテンが風もないのに動くのが一瞬、ほんの一瞬だったが見えた。

智樹はよく見ようとベッドに近づいて行った。

一步一步ゆっくりと近づくにつれて、智樹は何か得体の知れない恐怖を感じ始めていった。

だが、やはり好奇心には勝てず智樹はついにベッドの前にたどり着いた。

カーテンで中は隠されていて中に何がいるかは見た限りでははっきりとは分らない。

一息ついて心を落ち着けさせた智樹は意を決してカーテンを開いた。シャツというカーテンが勢いよく開く音にすら智樹は気を巡らせていた。

「・・・何だよ」

中には人どころか猫の気配すらしない。

呆れて智樹はその場に座り込んだ。

ベッドの下の女と目が合った。

「……うおおおおあああうおおー！」

智樹は驚いて尻餅をついた。

智樹の奇声に驚いたのかベッドの下の子までビクッと肩を震わせた。

しばらくそのまま時間が流れた。

終始、2人とも表情一つ変えずにお互いを見つめあっていた。

こう書くとまるで2人は恋に落ちたかのような感じだが、お互いの表情はそれぞれ片や恐怖、片や驚愕の色で染め上げられている。

恐る恐る智樹が尋ねる。

「そんな所で何やってんだ？」

女は自分が滑稽な状況下に置かれていることに気づき、恥ずかしそうにベッドの下から這い出てきた。

女・・・というよりこの人物は少女と表現する方が正しいだろう。

髪は肩くらいまでの長さで、顔つきは整っており、肌は透き通るかのように白い。
白のワンピースを着ており、オレンジのビーチサンダルを履いている。

歳は智樹より2つ3つ上といったところだろうか。
だが、かなり狼狽しているようなので、智樹も年上だからとあまり壁を作らずに話せそうだと感じた。

また、室内は静かになる。

堪らなくなつた智樹が出て行こうと少女に背を向けた。

「待つて」

突然、沈黙を破られたのと声をかけられたので智樹の心臓は縮み上がった。

少女の声は比較的中性的なものだった。

「どこ行くの？」

「・・・外、出んだよ」

智樹は出来る限りドスを利かせた声で答えたつもりだったが、少女はそんなの気にせず目を輝かせて智樹に聞いた。

「外って何があるの？外って楽しい？面白い？」

「ちよっ、ちよっ、ちよっと待て」

智樹はいきり立つ少女を一度落ち着かせる。

「もしかしてここから出たこと無いのか？」

少女はコクリと首を縦に振る。

智樹はそれを見て苦笑しつつも冷や汗を掻き始めた。

白状するならば、智樹はこの少女のことを知っていた。

といつても、昔からの知り合いというわけでもない。

こっそりポケットのカルテに目をやる。

やはり、そこには少女の顔写真があつた。

ここの病院はもう潰れているのでこの少女がまだ患者であるという可能性は0だ。

そもそもそれは服装で分かる。

そう。

恐らくこの少女は俗に言う幽霊という奴だと智樹は認識した。

「どうしたの？」

少女は自分が幽霊であることを知らないのか、明るく智樹に問う。

「いや、何でも・・・ない」

智樹はさりげなく外に出ようとするがやはり少女に制された。

「ねえ、外の話聞かせてよ」

「だから何で俺がそんなこと教えなきゃいけないーんだよ、コラ」

と、いつもの智樹なら言えただろうが今の智樹にそんな勇氣は残っていない。

「なら、一緒に着いてこい」

智樹にとっても苦肉の策だったが、憑り殺されるかもしれないという恐怖からその提案をした。

何なら知り合いにでも押し付けてやるという考えもあった。

だが、少女は寂しそうに俯き、返した。

「駄目。お医者さんが部屋から出ちゃいけないって・・・」

智樹はそれを承諾してここから出ていくという選択も出来た。

それが出来なかったのは少女のその時の悲しそうな表情を見て情が芽生えてしまったからというのもあるだろう。

少しくらい願いを聞いてやってもいいか。

柄にもなく、智樹は心の中でそう呟いた。

「大丈夫だ。今、医者はいないからな」

「・・・何で？」

「それは・・・そう、皆休みを取ったんだよ」

「お医者さんが全員？」

「そう!!」

流石にちよつと苦しかったかと、智樹は不安になったがどうやら杞憂だったらしい。

「んじゃ、ちよつとだけ」

少女の目は期待に満ち溢れている。

着いて来いと言わんばかりに智樹が部屋から出ると少女もその後を

追ってきた。

「そういえばお前名前は？」

「私は人見由乃^{ひとみ ゆの}。あなたは？」
「村田智樹だ」

こうして村田智樹の人生で最も長い1日は始まった。

病院から出るなり、智樹は知り合いへと電話を掛けた。

数回のコール音の後、その人物は電話に出た。

「何の用だよ？」

気だるそうな声で応答する人物の名は武田蓮斗。

智樹の数少ない友人の一人である。

彼は幽霊やら超常現象やらのオカルトチックなことに精通しており、家も寺の家系というわけで智樹はこの件には彼が適任だと思い、電話を掛けた。

蓮斗は成績こそ悪くはないが、放浪癖があり、よく学校を休んでいた。

その為、不良である智樹とも何か通じるものがあり、馬が合ったのだろう。

「今どこだ？」

「えーと・・・新潟？」

「どこまで行ってたんだよ・・・あのな、今から俺の言うことを良く聞いてくれよ」

智樹は事のあらましを説明した。

最初は適当に聞いていた蓮斗も徐々に事の重大さが分かってきたよう
うで、真剣な態度で時折、相槌を打っていた。

「で、その霊は？」

「今はその辺飛んでる鳥だの蝶々だの景色だのに夢中になってるよ」

「そうか。なら安心した。多分そいつは自分が死んだことに気づいていない。絶対に気付かせるな。気付いた瞬間、お前のこともそっちに引きずり込もうとするからな。一応、親父にも連絡しとく」

「親父さんは何分で着く？」

「親父が来るかは分かんがな・・・2時間以内には。それまで持ち堪えてくれよ」

そう言い終えると、蓮斗は電話を切った。

落胆している智樹の前に突如由乃は現れた。

「うおっ！・・・驚かすなよ」

「あつ、ごめん。そろそろ行きたかったから」

「ああ、探検な。じゃあ行くか」

「うん」

智樹はぎこちなく歩き出した。

大見栄切って一緒に行こうと言ったものの、智樹は女性との付き合いが全くなかったと言っても過言ではない。

小学生までは普通の交友関係を保っていたのだが、中学に上がった途端、友人の数は激減した。理由は言わずもがなである。

小学生の頃からの友人は3人いるかいなかである。

話は逸れたが、そんな訳で智樹は女性が行くと喜ぶ場所など全く分からなかった。

冷静な思考が残っていたなら、彼にも助けが入るまで適当に街中を歩くという選択肢もあっただろう。

時折、由乃からの

「あれは何？」

といった類の質問に答えながらも智樹は必死に打開策を考えていた。

「・・・おし、あそこ行くぞ」

そう言って、智樹が指差した場所はゲームセンター！。

15分もずっと考えて出した答えにしては随分とお粗末である。

もっとも、一番重要なのは由乃からの返答だったが。

「うん！面白そう」

「じゃあ、決まりだ」

2人はゲームセンターへと足を踏み入れた。

昼間のゲームセンターというのは案外静かなものである。

勿論、ひっきりなしにゲームの音は耳に入ってくるのだが、人はまばらだ。

先頭を歩いていた由乃が1台のUFOキャッチャーの前で足を止めた。

智樹が声をかけようとした時、由乃の中を1人の男性店員がすり抜けた。

この光景を見て、智樹は改めて彼女が実体を持たないことを認識した。

「となると、今喋っている言葉も独り言になるのか」

智樹は考えた末、携帯電話を耳に当てて、彼女と会話することにした。

「由乃、どうした？」

「可愛いな、これ。・・・あれ？智樹の耳に当てているそれは？」

「こ、これか？えーっと・・・周りの音を確実に聞くための道具だ」「補聴器みたい！かつこ悪い」

そう言って笑う由乃に智樹は思わず見とれてしまった。

「うるせー。そんなこと言うならその人形取ってやんねーぞ」

顔を赤くしながらそう言っても説得力は皆無かに思われた。

「え・・・取ってくれるの？」

由乃はちよつと照れたような顔を一瞬して、期待の眼差しで智樹を見つめた。

智樹が機会に100円玉を入れるとゆるい顔をした猫の人形の海へとアームが落ちていく。

アームは一匹の猫を掴むと、そのまま宙に浮いた。

「おお！」と由乃が歓声を上げる。

受け取り口に落ちてきた人形を手に持ち、智樹は誇らしげにそれを由乃に見せる。

「すごい！！」

「こついうのは昔から得意だからな」

智樹は由乃へと人形を手渡した。

が、人形は彼女の手をすり抜けてタイル張りの床へと落ちて行った。

「あれ？」

智樹の体中の血が一気に冷えた。

少し前にも彼女の実体が無いということは認識済みだったのに、このようなミスをしてしまったことを智樹は大いに悔み、嘆いた。

蓮斗の言葉が今頃になってまざまざと蘇ってくる。

「多分そいつは自分が死んだことに気付いてない。絶対に気付かせるな。気付いた瞬間、お前のことをそっちに引きずり込もうとするからな」

「うおおおおっ！！次行くぞ！！」

半ば強引に智樹は人形を拾い上げると、走って店内を飛び出した。

「えっ！？もう！？」

由乃もその後をすぐに追う。

店員が冷やかな視線で自分を見送っていたのが分かったが、智樹にそんなのを気にする余裕があるはずは無かった。

息を切らしてヘタレこんでいる智樹を由乃が心配そうに覗き込んでいる。

「・・・大丈夫？」

どうやら由乃は自分の正体に気付いていないらしい。
すると、智樹も安堵した。

「おう・・・」

智樹はふと時計に目をやった。

まだ30分しか経っていない。

「・・・そういえば、由乃はどこに行きたいところとか無いのか？」

自分でももうどこに行けばいいか分からなかったのもあり、話を由乃に振ってみた。

「・・・ちよつとお金がかかるんだけど」

智樹は自分の財布の薄さをよく分かっているつもりだったが、

一応聞いてみた。

「どこだ？」

「プロレス見に行きたい」

智樹は思わず苦笑した。

この平成のご時世において、しかも一昔前のものを見たがるとは随分と滑稽である。

だが、どう考えても今からそんなもの見に行けるとは思えない。

「・・・って、いつの間にか俺は何を必死になって考えてるんだ」

智樹は小声でそう呟くと冷たく続けた。

「んな物、見れるわけねーだろ」

「えっ・・・そっか」

由乃はそう言つと今にも泣きだしそんな表情を作つた。

これでまた智樹の心を動かすことが出来る。・・・などということ
は勿論、由乃は分かつていない。

「分かつた分かつた・・・見せてやるからちよつと待つてろ」

智樹は携帯の電話帳を開き、片っ端から電話をかけ始めた。

街を歩くは3人の僧の格好をした男たち。

とはいえ、流石に人目を気にして人通りの多いところは避けている。

3人とも、急いでいるようであり、心なしか速足である。

一番左端の背の高い僧が口を開く。

「武田和尚、例の少年はどこに？」

真ん中の一番の年長者である僧が和尚であるのだが、代わりに右端のがっしりした体格の僧が答えた。

「そんなこと分かるわけないだろ。ただ、この辺りであることは確かだ。静かにしてろ」

背の高い僧は和尚に軽く頭を下げると、また黙って歩を進める。

それからすぐ和尚は足を止め、口を開いた。

「おそらく・・・河原の辺りじゃ」

男たちは更に歩みを速めた。

「で、これはどういことなんだよ、智樹」

先述した智樹の数少ない友人の一人桐谷きりたにが文句を言う。

目の前には智樹の通う中学と敵対関係にある別の中学の制服が3つ。

3人ともこちらを睨みつけている。

対するこちらは智樹と桐谷、そしてもう一人の友人市橋いちはし。

3対3でお互い向き合っている。

「いや、お前らには助っ人として登場してもらおうと思ってな」

そこで、初めて市橋が口を開いた。

「それは分かる。・・・だが、この格好とリングは何だ!？」

先述した通りの状況だったら人はヤンキー同士の喧嘩と思うだろう。

相手側のヤンキーは学校の制服姿。

だが、智樹たちの格好は珍妙なものだ。

まず、桐谷は赤のマスクを着用している。

そして、上半身裸でマスクと同じ色の赤のパンツを穿いている。

続いて市橋はアフロのかつらを被り、何故かそこから2本の牛の角が生えている。

彼も桐谷と同じく上半身裸で、パンツは黒。

そして、智樹はどこで買ったのかホッケーマスクを被り、何故か彼だけ上下黒のジャージ姿だ。

「……お前らふざけてんのか？」

相手のヤンキーがそう問うのも納得である。

「えー、ではこれから3vs3のトリオプロレスを始めます」
「おい智樹、プロレスって何だ？」

市橋が詰め寄ってきた。

「そうかそうか。じゃあ、こっちはバッファロー市橋を一番手に出そう」

「は？ちょっと待て。おい！」

市橋改めバッファロー市橋は智樹に何事が喚いていたが、智樹と桐谷は彼を残してリングを降りた。

「バッファロー頑張れ！！」

市橋に由乃からの声援は届いていない。

もうお分かりだと思うが、智樹は友人たちを使ってこの場で簡易プロレスをしようと考えているのだ。

友人たちは携帯で呼び出し、ライバル校のヤンキーたちはコンビニでたむろしているのを上手く誤魔化して連れてきた。

そして、現在に至る。

市橋は相手のヤンキーの腹に決るようなジャブを入れた。

そこからワンツーへと繋げて相手に反撃の隙を与えないようにしている。

どうやら喧嘩の腕だけで言ったら市橋の方が上のようなようだ。

そして、ついにヤンキーの顔に右フックが入り、ダウンした。

「池田、大丈夫か!?!」

相手の側についている味方のヤンキーが心配そうに駆け寄る。

「大丈夫だ・・・」

「てめえ、上等じゃねえか!?!」

まだ名前を明かしていないヤンキーの片方が市橋に殴り掛かる。

だが、反撃したのは何故か智樹だった。

智樹のドロップキックで名無しのヤンキーは吹き飛ばされた。

「おい、タッチしてねーじゃねえか。ルール違反だ!!」

智樹の指摘に桐谷が冷静にツツコミを入れる。

「だから、何でプロレスのルールなんだよ」

「ルールも何もこれはプロレスだ!」

「だから、何で俺たちはプロレスしてんだ!」

「うるせー、文句が有るなら全員がかつてこいや!!」

智樹の一言で相手のヤンキーは勿論、味方の桐谷と市橋ですら智樹へと向かっていった。

リングに倒れていたのは5人。

立っているのは1人。

「う・・・ウイナー」

智樹は片手を上げて勝利を示す。

だが、いくら智樹といえど、友人を本気で殴るのは気が引けたので、桐谷と市橋には手加減している。

他の3人には容赦なく殴り掛かったが。

「すごい！！格好良かったよ・・・えーと」

「村田智樹ことジェイマスクだ」

そう言つて、智樹はホッケーマスクを外した。

「智樹ってプロレスラーだったの!？」

「面倒だからそういうことにしといてくれ・・・」

それだけ言い終えると、智樹は仰向けに寝転がった。

空はもうすっかりオレンジ色に染まっている。

由乃はまだ興奮を抑えきれないのか智樹の傍へと寄ってきて話し出す。

「まさかパイルドライバーを決めるなんて思ってたよ!」

「ああ・・・意外と重かったから難しかったけどな」

「でも、案外肉弾戦多かったよね」

「それはただ単に投げんの疲れたから本来のやり方に戻しただけ・・・」

「」

「ラフファイターだったんだ！」

「お前、本当に幾つだよ。詳しすぎる」

そう言っただけで智樹は苦笑した。

「誰と話してんだ？」

智樹の肩がまるで陸に揚がった魚のように震える。

声の方向にはマスクを取った桐谷、アフロと角をライターで燃やしている市橋がいた。

2人とも呆れたような顔つきで智樹を見つめている。

智樹が何か言う前に桐谷が言葉を続けた。

「また、そんな変なもの拾ってきやがって」

智樹は驚き目を見開きながらも返した。

「見えてるのか？」

「ボンヤリとならな。市橋は？」

「全く・・・」

「・・・何時からだよ」

「最初から。俺らの演技力も中々のものだったろ？」

桐谷はそう言って智樹の背中を叩いた。

パシンと良い音が鳴り響いた。

市橋は遠い目をしながら語り始めた。

「あの子犬の時と一緒にじゃねえか。えーと、マクレーンだったか？
あの不細工な犬」

「いたいた。智樹が拾ってきた奴な」

「そう。4か月くらい飼ってたけど、脱走されてな」

「餌が5日に1回だったからな。逃げたくもなかっただろ」

桐谷と市橋は大声で笑った。

最初は黙って見ていた智樹もやがて笑い出し、由乃も訳が分からずも笑い出した。

そして、彼らの笑いは3人の僧によってかき消された。

智樹たちはその3人の内の1人に見覚えがあった。

「智樹くん……桐谷くんと市橋くんじゃったかな？」

中央の老人が優しい声でそう言う。

確認するかのようにもう一度、3人を見回して老人は続けた。

「もう心配ない。幸いそいつもまだ完全には智樹くんに憑りついてはおらんがな」

憑りつくという単語を聞き、桐谷は小声で尋ねた。

「何かヤバい話？」

「まあ、それなりには。どうでもいいけどあの爺さん誰だ？」

「武田んとこの爺ちゃんだろーが」

「本当にお前、人の顔覚えねーな」

市橋は呆れたようにそう言つと、蓮斗の祖父に向き直つた。

桐谷と智樹もそれに倣う。

そして、智樹が口を開いた。

「で、どうすればいいんだよ？」

智樹の口のきき方に怒りを覚えたのか、横の2人の僧が前に出てくるが、それを蓮斗の祖父が制する。

「何、そんなに面倒なことはせん。その霊をこっちに引き渡してくればそれでよしじゃ」

そこで一旦言葉を区切り、付け足すように続けた。

「そうそう。完全ではないとはいえ、そいつは智樹くんに憑りつきかけておる。じゃから、わたらの声は聞こえていない。君しかそいつと話せんのだ。だから、上手く言いくるめてくれ」

智樹はそつと由乃の方へと目をやった。

何も分かっていないというような顔をしている。

事実、彼女はこの状況を理解していない。

今から自分がこの世から除かれようとしているだなんてこれっぽっちも考えていない。

智樹はその由乃の顔を見て、ふと思った。

彼女が理解していないのはこの状況だけではない。

世の中に存在する様々なことをまだ知らないのである。

このまま消えていくのはどれだけ虚しいのだろうか。

少なくとも自分のような一般人には想像もつかない程なのだろう。

智樹の決意は固まった。

「由乃、面白いものを見せてやるからちよつと来い」

「え？う、うん」

半ば強引な物言いで智樹は由乃を蓮斗の祖父の元へと連れて行った。

「おお、よくやった智樹くん。お疲れざ！？」

穏やかに笑う蓮斗の祖父の鼻っ面に智樹の頭頂部が当たった。

頭突きである。

蓮斗の祖父は信じられないといった表情で鼻血を噴水の如く吹き出しながら倒れた。

「坊主の血達磨一丁上がり!!」

智樹はやり切ったような顔をして、脇目も振らずに走り出した。それに訳も分からず由乃も着いて行った。

残された4名は啞然としていたが、その内の2人、蓮斗の祖父の部下らしき僧が智樹を追って走り出した。

彼らは思った以上に足が速く、あっという間に智樹に追いついた。

僧の片方が智樹の肩を掴み、思いっきり彼の頬を殴ろうと腕を後ろに引く。

だが、その拳は桐谷の手によって抑えられた。

「お坊さん。もうちょい俺らと遊んでだよ」

桐谷はそう言って僧を押し倒して、マウントポジションを取る。
市橋も同じように僧に殴り掛かっている。

殴りながらも市橋は嬉しそうに声を張り上げて叫ぶ。

「智樹ー、そういえば明日は新譜の発売日だったなー。楽しみにしてるぞー!!」

「あつ、俺は新しい服な!!」
と、桐谷も便乗する。

自分たちは喧嘩を楽しむことが出来、こちらはCDに服を買わなければならない。

どう考えてもこちらの一方的な損な気がするが、今は気にせず智樹は手を振って彼らの要望を承諾する意を示した。

「もしもし、蓮斗か？」

「ああ。どした？」

「悪い。お前の爺さんの顔面に頭突きしちった！」

「構わん。俺もあの人の偽善者っぷりには呆れてたからな。俺がやりたかったくらいだ。
で、何があった？」

智樹は自分の心情の変化とこれまでの経緯を説明した。

心情の変化に対しては、蓮斗も驚いたのか何度も聞き返した。

そして、一しきり喋り終えると、蓮斗は押し黙ってしまった。

智樹はその沈黙がまるで自分を責めているかのように思えたので、重々しくも口を開いた。

「・・・なあ、俺とてどんな馬鹿なことを言ってるか分かってるつもりだ」

「まあ、確かに馬鹿な考えだ。・・・だが、俺はその考え嫌いじゃない」

智樹は心底驚いた。

てつきり反対されるものだと思っていたからである。

もしかしたら、最初の電話の時とのギャップがあまりにも大きすぎるからなのかもしれない。

「出来る限り、家の寺の奴らの足止めしとく」

それだけ言つと智樹の返事も待たずに通信は途切れた。

それを見計らつてか由乃が智樹に尋ねた。

「何であの人たちを傷つけたの？」

「え・・・あー、あいつらはお前を捕まえに来た医者だったからだ」

「なら、帰らないと」

「何で帰る必要がある？もつと外を見ていたくないのか？」

「それは・・・そうだけど」

由乃は弱々しくだったが、もつと外を見たいと言った。

それだけが智樹の動力源だった。

走りに走り続け、ようやく辿り着いたのは大きな木の下だった。

がむしゃらに走り続けたため、ここがどこなのか智樹ですら分かっておらず、偶然見かけたこの大きな木の下に入り込んだという次第である。

何となく自分たちを守ってくれるような気がして、智樹は木陰に座り込んだ。

由乃も彼の隣に座った。

しばらくの間、両者黙っていたが、ついに智樹が口を開いた。

「どうだった今日は？楽しかったか？」

「うん。ちょっとドキドキしたけど、とっても楽しかったよ」
「なら良かった。これからこんな楽しい日々が続くんぞ」

「ううん。それは出来ない」

「どうしてだ？」

「だって私はもう死んでるんでしょ？」

智樹の頭の中は一瞬、真っ白になった。

慌てて隣に座る由乃に目をやる。

こちらを向いてはいないが、とても楽しそうな顔をしている。
これが死者の顔なのだろうか？疑問に思うほどである。

或いは、ただのやせ我慢なのだろうか？

その癖、彼女のその表情には悲しみも同居しているように見えるので不思議だ。

「そんな訳ないだろ。お前は生きた人間だ」

「もういいの。実を言うとプロレスの時、智樹のポケットからカルテが落ちたのを見たの」

慌てて智樹はポケットからカルテを出す。

確かに12枚あったはずのカルテは7枚になっている。

その7枚の中に由乃のカルテは無かった。

「違う・・・違うんだ」

「違うくない。私はもう死んでる」

「違う!!」

智樹は頭を抱えてうずくまった。

もう憑り殺されることに恐怖など感じていない。
ただ彼女が目の前から消え失せることが怖かった。

智樹は今日までの日々を浮かんでは消える泡のようなものだと考えて生きてきた。

未来に希望は無く、いつ死んでも構わないとすら思っていた。

だが、由乃がそんな日々を変えてくれた。

全く何も知らない0の状態の彼女に触れることによって智樹はこの少女にも未来への可能性があることを感じ、自らもそうであると気が付いた。

智樹はもう既に自分の未来に期待していた。

目の前で大事なことを気付かせてくれた恩人が消える。

考えたくもない事実だった。

そして、過ごした時間は短かったが、もし由乃が自分が死んだことに気付いた時、するであろう行動も予測できた。

「もう私、あなたの前から消える」

「どうして・・・？」

「だって私のせいで智樹やお友達まで不幸になってるんでしょ？私さえないなかったら何事も起きなかった」

「お前のせいじゃない」

「多分だけど、さっきの人たちってお坊さんか何かじゃないの？私を成仏させるための。」

「・・・そうでしょ？」

もうそれからは何を言っても無駄だった。

智樹はありとあらゆる言葉で由乃を引き留めようと努めた。

だが、どれだけ言葉を重ねても由乃の首が縦に動くことは無かった。

「それなら・・・それなら」

「もういいの。その気持ちだけで十分。智樹は優しいね」

「待て・・・行くな。まだ教えてないことが沢山・・・沢山あるん

だぞ！」

由乃はゆっくりと智樹から目を背けた。

それは智樹の涙を見たくなかったからか、それとも自分の涙を見せなくなかったからか、或いは両方か。

沢山の足音が近づいてくる。

迎えが来たのだ。

智樹に背を向け、弱冠声を震わせながら由乃は彼に告げた。

「もう・・・行くな。今日はありがとう智樹」

去ってゆく由乃の背中に智樹は子供のように泣きじゃくった嗚咽交じりの声で彼女に言葉を返した。

「俺、今から必死に勉強する！で、教師になる！それで・・・それで、お前の知らないこと沢山教えてやる！」

だから！・・・絶対に生まれ変わったら俺のところに来い！

・・・絶対だかな！！」

由乃は俯き、その場で肩を震わせながら答えた。

「分かった・・・絶対会いに行く！
だから・・・その時まで立派な教師になってね」

言い終えると、由乃はそのまま智樹に背を向け、歩き出した。

智樹はずっと彼女の背中を見つめていた。

あれだけ暗闇でもはっきりと見えていた由乃の姿が複数のお経に消されていくかのように不思議と少しずつ薄くなっていった。

ゆっくりゆっくり薄くなっていった。

だんだんだんだん薄くなっていった。

やがて彼女の姿が完全に消えたと同時に、智樹はただ訳も分からず咽び泣いた。

空に浮かぶ満月が彼のシルエットをくつきりと映し出していた。

「で、それから先生は真面目に学校にも行くようになって見事教師になった」

話し終えて智樹は生徒達を見渡す。

一瞬、目を白黒させていた生徒達は一斉に笑い出した。

「先生、面白ーいー!!」

「嘘つくならもつとまともなのにしなよ!!」

「絶対だかな!!……って、アハハハ!!」

智樹は少し恥ずかしくなって俯いた。

すると、ちょうど良いタイミングでチャイムが鳴った。

次の授業は体育だ。

日直が適当に号令を済ませると皆一斉に廊下へと飛び出していった。

「まったく、現金な奴らだな」

そんな小言を呟きながら、智樹自身もジャージに着替えるため、教室を出る。

ふと後ろを振り返ってみる。

そこには少女がいた。

智樹の記憶には無かったので、別のクラスだろう。

否、記憶に無かったというのは少し違う。

少女の姿は今も記憶に残っていた。

白のワンピースを着て、髪を肩まで伸ばしており、肌は透き通るように白い。

ギョツとしてつい智樹は少女に声をかけてしまった。

「由乃・・・なのか？」

少女は突然話しかけられて驚いたのか目を見開いた。

ようやく、智樹は思考が追いつき、赤面した。

「あつと、ごめん。他のクラスの子と間違えたみたいだ。ハハハ」

智樹は気恥ずかしさから少女に背を向け、そそくさと歩き出した。

智樹のあの時のままの懐かしい口調で言葉が浴びせられた。

「立派な教師になったね。・・・すごい！」

少女は後ろから智樹をその小さな白い腕で抱きしめた。

6（後書き）

はい、というわけでこれにて完結です。

いかがでしたか？

よければ、感想など書いてくれると幸いです。

この作品で学んだのはやはり文学的要素でしょうか。

と言っても、その要素はかなり薄いですが・・・。

そして、ラストはキャラに感情移入してしまい、少し涙を流しながら書いておりました。

自分の文章能力がもっと高ければ、伝えられるのですが（笑）

最後にここまで読んでくれた方々、
ありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4386t/>

ゴースト・ストーリー

2011年10月8日04時35分発行